

---

# リリカル転生人生

作者ガタック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル転生人生

### 【Nコード】

N4927L

### 【作者名】

作者ガタック

### 【あらすじ】

交通事故に遭い転生する事になった少年、進藤・健太郎がおくる転生人生。

なんと転生先は魔法少女リリカルなのはの世界だった。そんな事は知らずに健太郎の物語は動きだす。

主人公以外にも多数に存在する《転生者》達。

健太郎と原作キャラ、転生者達が織り成す物語。

## 作者挨拶&注意事項

(・ ・ ・)初めまして作者ガタツクといたします。初めての小説になるのでシヨボーイ小説になりますが頑張って投稿して行こうと思います。どうぞ宜しくお願いします。

### 《注意事項》

- ・ハーレムになると思う。
- ・主人公はヘタレ
- ・転生者が(オリキャラ)一人じゃあない
- ・主人公は最強みたいな能力はあるが条件次第(使えないシヨボーイ能力は多数持っている気になる方は小説で)
- ・ご都合設定
- ・血の表現あり

以上のどれか駄目な方は申し訳ありませんが回れ右お願いします。

## プロローグ

### 《プロローグ》

正直言う…ありえない…

本当…ありえない…

今日何回目かになる「ありえない」という呟きのもと自分こと進藤健太郎こと健太郎は呟いた。

目の前には神と名乗る爺さんと向き合っている。

「それで君には他の世界に言っただけなのじゃよ」

そう自称神こと爺さんは自分に構わないで話を進めている。

だいたい、なんでこんな事になったのか自分は思いだしていた。

そう、こんな事になったのは高校に入学して、すぐ入ったバイトの給料日で、とりあえず給料を降ろす為に銀行に行っていた時の事だ。

信号が変わり自転車で横断歩道を渡っている最中に大きな衝撃が体を遅いそれから記憶が途切れた。

短いと思うけど、本当にこれだけだからしょうがない。

自称神様が言う話、トラックで自分を轢き殺したらしい本人が誤って死なせてしまって「すまない」と謝罪はしてもらったけど正直やるせない。

「気が動転して思うが他の世界に転生してもらうか天国か地獄に行ってもらう事になるからの。こちらとしては、ワシの不注意が原因じゃから転生を選んだ場合、君が欲しい者をなんでもいいからあげよう」

神様：なんでそんな選択権がない選択権を選ばせるかな…そんなの転生に決まっている。欲しい物がなんでも手に入るなどという特典というエサを出されたら人間という生き物はすぐに食らい付くのだから。

「じゃあ…転生で」

小さな声ではつきりと答えた。

その声に神様はニツコリ満足すると「なら何が欲しいかのう？」と自分に問い掛ける。

そうなるようにエサで釣っておいた癖によく言う…

心の中で呟く、多分神様というのだから人間の心も読めているのだろうけど心の中で呟く。だってそうだろう普通の人間だったら思うだろ。

「なら前にいた世界の両親に一生生きていけるだけのお金を下さい。あと前にいた世界の両親と友人の俺に関する記憶と証拠を全て無くしてもらっていいですか。」

「そうかそうか親孝行じゃのう分かった。他には何かあるかのう？」

「転生先の裕福じゃあなくていいから普通の生活の保証と…」

「とっ？」

神様が顎にある髭を触りながら問い掛ける。

最初の2つは正直オマケ両親には今まで保育園から高校まで入れてくれた恩があるし、前にいた世界の暮らしは貧相だったから転生先の生活保障を希望した。

そして最後は今まで、ずっと欲しかった手に入れたかった物だ。

「力です。誰にも屈しない圧倒的な力が欲しいです。」

「力…とはもう。わかったワシみたいな神様の力とはいかんが絶対的な力を君にあげよう…他はないかい？」

「特には」

「分かった。ならば煎餅にこれを貰っておくといい」

そう言つて神様から受け取ったのは小さな赤いペンダントだった。中央部分には何の意味かは分からないが紋章が刻みこまれていた。

「これは？」

「これは《アルメディア石》という聖霊アルメディアを一度だけ召喚出来る特殊な石で使用した者の願いを何でも一つだけ叶えてくれる貴重な石じゃ。」

願いを一つだけ何でも叶える？そんな事が出来るなら死者をも蘇る事が出来るのではないだろうか…何だよそのデタラメな石は、多分対価が必然的に必要になっているだろうと思う。

「対価は何ですか？」

「ほう…よく対価あると分かったのう」

神様は目を細めて自分にいう。

「むろん願いを叶える為には、それなりの対価が必要じゃ。その対価は聖霊アルメディアが欲した対価となる。例えば力、記憶、思い、命などをな」

「そうですか」

やはり対価があつたか…要するに使わなければいいだけだけど…。

「それでは準備はいいかな？」

「はい…」

「それではよい転生を…」

神様は杖を地面に刺すように叩きつけると目の前が真っ暗になり自分意識は消えた。

そして今までいた健太郎の姿は、その場所から消えていた。

「さあ君はどんな物語を見せてくれるのじゃあ転生人形君…」

健太郎がいなくなった後に物は何一つなくなつて一面真っ白な世界になっており音、時間すらもない世界の中、歪んだ笑顔で佇む神以外は何もいなかった。



## 0・5話

健太郎が意識を回復した時は自分の姿は赤ん坊の姿に戻っていた。

声をあげても出るのはダーやらアーなどの言葉しか出せず、ただ時が過ぎるのを待つしか無かった。

健太郎は待つのは嫌いだ。何もする事もなくただ時間を消費するだけの毎日が退屈で仕方なかった。

（（暇だな））と思ってても現実是不変ならない。現実とは時に残酷なのだ。

そんなこんなで2年の月日が流れヨチヨチ歩きが出来る頃にはテレビや人間観察、風景を楽しむなどの趣味が出来た。

そして4歳の誕生日を迎えると健太郎に新たな趣味が追加されることになる。

小さな公園にて…

パシュ！

「くっ…くっ…」

《集中して下さいマスター 瞬の油断が命を落とす引き金になるのですよ》

うるさい機械だ。そう健太郎は心の中で思ったが敵からの攻撃が自分に向けられすぐに敵に集中する。

敵と言うが今戦っている敵はスフィアと言い魔法戦闘訓練用の魔力

で創った物だ。

そして健太郎に指導をしていてなおかつ魔法知識を与え訓練しているのは自称神から送られて来た魔法世界のスーパーキューティープリティデバイス《アイナ》らしい。

だいたい「デバイスってなんだよ」と健太郎は思う。口にはしないが思う。それにキューティーカープリティかスーパードレか一つにしてほしいというツツコミはあえてしない。

だけど話相手と魔法知識など魔法の使い方を教えてもらえる事は、健太郎にとっては願ったり叶ったりだった。

いくら2度目の人生といってもまだ四歳、転生前の年齢を合計すると20。正直一人は寂しいし話相手ぐらい欲しい。

それに健太郎は転生前はただの一般的な人間である特別でもなんでも無かった。どちらかと言えば一般的な人間より下に位置すると健太郎自身は思っている。

転生前は顔も普通だし体力もあまりあるほうでは無かったし学力は最下位だった。何よりこれといって目立つものが無かった。

だが以外に魔法という1つの力に健太郎は熱中した。

1つ新しい事が出来たら嬉しくなって熱中した。

だから強くなるには努力から初めなくてはならない努力して自分が少しずつでも強くなっていく事が、まるで自分のレベルが上がる事に呪文やら特技を覚えていくRPGの主人公になったみたいで嬉しかった。

バシユ！

「くっ！…くらえっ！」

バキィ！バシュ…

敵の攻撃を避け機械的に出来た剣で殴る。勿論、剣技など扱える訳もなく素人まさりの斬るではなく叩くように切り裂く。それでもスフィアは粉々に碎け姿を消す。

「…どうだった？」

剣状態になったアイナに健太郎は尋ねる。

《全然ダメですね糞以下です。正直言つて剣を使い慣れてないです。しかも魔法構成が甘いし状況判断が遅いです。ブチスライム以下ですな》

「マジか…」

自身の武器に言われ少し凹む。アテネが言つた事は少なからず自分でも思つていた事だ。正直、剣なんて持った事ないし魔法なんて最近習い始めたばかり、更には戦いなどもつての他だ。いくら純粋に力と魔力、肉体能力があろうと、これでは『誰にも屈しない圧倒的な力』には到底ならない。

まあ一般的な地球の人間から見ればかなり強いかもしれないけど目標までの道のりまでは夢のまた夢である。

それにアイナからの話によると神から貰つた『誰にも屈しない圧倒的な力』はリミッターがかけられているらしく、すぐには使えないという事。しかも特殊なりミッターがかけられており使えない。それに使えたとしても子供の肉体では体がバラバラになってしまつらしい。

それで死なない為のリミッターらしい。

まあ一番の《問題点》は他にあるんだけどね…

それから魔力練習と剣技練習を始めて3ヶ月。幾分マシにはなつてきてはいるが全然ダメだったりする。

そして健太郎が5歳の誕生日を迎えた日、運命の出会いを体験することになる。

そう物語はまだ始まってもないのだから…

0・5話（後書き）

アイナ《初めまして皆のアイドル。スーパーキューティープリティ  
デバイスアイナです》

健太郎「初登場ぐらい真面目にやろうよ」

アイナ《NO！マスターは分かっています普通デバイスではあ  
まり喋らないで面白くないじゃあないですか》

健太郎「いや武器に面白さを求められてもなあ」

アイナ《まあヘタレヘボクソツタレマスターを頑張って立派な魔法  
使いにするのが私の役目です》

健太郎「言いたい放題だなオイ」

アイナ《それじゃあ次回もリリカル転生人生見てね！アイナとお  
約束だよ》

健太郎「オヤクソクダヨ」

アイナ＆健太郎「まったねー《まったねー》」

## オリジナリル設定？

《オリキャラ設定？》

吉田健太郎

性別 男 年齢5歳 転生前は16歳

髪の色 黒

瞳の色 茶色

この物語の主人公。転生前の世界で事故に遭い亡くなり転生した主人公。

容姿は普通。得に何かあるという訳でもなくイケメンでもない本当に主人公か？と聞きたくなるような主人公。

容姿で本人自身は不細工と思っておりモテる訳がないと思っているが本人が鈍感なだけで転生前には好意を寄せる者も何人かはいた。

人と話す時は普通に話す事が出来るが本当は恥ずかしがりやで人から褒められたり、お礼を言われる事に慣れていない。

更に転生前に恋人一人作る事もなく死んでしまったので恋愛においては耐性というか経験がなく、そういう展開やムードになるとシドロモドロになる。

転生の影響か肉体的能力と頭の良さが少し上がっている。

神に《誰にも屈しない圧倒的な力》を貰い《誰にも屈しない圧倒的

な力』という特殊な能力を使える。

デバイスは神に創られたデバイス《アイナ》

武器は主に剣を使用するが本来、健太郎が得意なのはナックルに刃があるクローという武器である。

魔力B（条件によっては圧倒的）

戦闘能力C（条件によっては圧倒的）

最近驚い事は転生前と転生後の苗字と名前が一緒という事である。

舞台裏の後書きではツッコミキャラであり名前は作者ガタツクが「リア友の名前使ったわ」と軽く言われカッコイイ名前などには縁のゆかりもない哀れな主人公だったりする。

バリアジャケットは黒の軽鎧に長ズボンに少し黒色の手、足を守るように金属ばい物がついており騎士を思い浮かべさせるような格好。

本人は何も取り柄がないと言っているが転生前の高校生時代アルバイトを頻繁にしていた事からアルバイトで学んだありとあらゆる知識と技術を取得している。

特にレジ打ち技術と包装技術はプロレベルであり転生前は、ありえないスピードと精密なレジ打ちで接客する姿からアルバイト仲間やお客から《レジの帝王》と呼ばれ、包装も同じくありえないスピードと精密な包装により《包装機関車ケンタロウ》と言われるまでなっている。

余談だがどちらのアルバイトからも「高校を卒業したら正社員になつてくれないか」と社長見ずから健太郎にお願いにくるほど実力の持ち主であつたりする。

## 《デバイス設定》

### ・アイナ

神に創らた超高性能デバイス。健太郎の能力を補助したり魔法を教えたり人のようにペラペラと人間ように喋るデバイス。

いろいろと謎が多く不思議なデバイス。

冷たい性格をしているが本当は結構なお喋り好き。趣味として自作のトレカ画像造りをしている。

待機状態は黒い腕時計。

音声は女性の声であり本人いわく凄く美人らしい。 デバイ斯的に

舞台裏という名の後書きではボケからツッコミ両方を使いこなすスーパーデバイス。



## オリジナル設定？（後書き）

ガタツク「オッス！おらガタツクよろしくな！」

健太郎「オッス！作者ウザッスよろしくな！」

アイナ《オッス！作者ウザ…よろしくな！》

ガタツク「ちょ！ちょつと！？酷いよ！仮にも作者だよ！？物語作った人だよ！！！？偉いんだよ」

健太郎「実はこの後書きは作者をウザイと思われるように設定されてるからだよ」

アイナ《寄るなウジムシ》

ガタツク「もつと作者に優しい設定にしてあげて！！」

健太郎「まあ、そんなこんなでキャラ設定？」

アイナ《マスターと私についてでしたね。すいませんねマスター》

健太郎「何が？」

ガタツク「あれ…？シカトされてる？」

アイナ《このスーパーキューティープリティデバイスの私が目立ち

過ぎてマスターは目立てなくて謝っていたのですよ》

健太郎「明らかに謝る気ないだろ？」

アイナ《まあマスターは地味男：略してジミオですからしょうがないと言ったらしょうがないですね。》

健太郎「否定が出来ないから悔しいな：まあ代わりにアイナがいるでしょ？」

アイナ《それが何ですか？私の人気はあげませんよ？》

健太郎「いないよ。まあアイナがいれば寂しくないかなーって思ってたさ」

アイナ《……………》

健太郎「？」

アイナ《このバカマスター…》

健太郎「バカで悪かったなバカで」

ガタツク「さーて！良いムードになってるけど次回は《正義！煌めけ俺の絆の力！くらええええええ魔王杉山まあああああああああああ！！！！》の話だぞ次回も見てくださいと泣いちゃうぞ！」

アイナ《勿論、予告は嘘ですが》

健太郎「作者が泣いちゃうのは本当だぞ」

「それじゃあまたねー!」

## 1話

5歳を迎え健太郎は日課となっている特訓をする為に竹刀を専用の袋に入れ家を出る。

いつも使っている公園を目指しテクテクと歩く。

まだ5歳の肉体なだけに進む距離は少ないが公園までは歩いて実は3分もかからなかったりする。

もちろんデバイスのアイナを身につけ公園に向かっている。アイナの待機型の姿は黒い腕時計であり子供が付けてもハッキリ言って不自然じゃあない。

もちろん黒い腕時計という事はバリアジャケット。つまりアイナを発動させ戦闘を行う服。簡単にいうと防衛服も黒色だ。

バリアジャケットをイメージする時に適当に黒い鎧をイメージしたらアイナがそれを改造し出来たバリアジャケットが今のバリアジャケットだったりする。

外見は兜がない軽い鎧みたいな服を着ている騎士を思い浮かべてもらえばいいだろう。実は結構気になっていたりするけど、この歳になってコスプレって…と思うと鬱だったりするから気にしない。

ついでにバリアジャケットを着る時と魔法練習をするときはコスプレ姿を見られないように人払いの結果を張っているから誰にも見られる事もなく思う存分に出来るから有り難い。

実際誰かにこの痛いコスプレ姿を見られた時には死ねるからなあ。と思いながら公園に着く。

いつもは誰もいない公園に一人の少女が、ぽつんと公園の砂場の隅っこで遊んでいた。

遊んでいると言っても顔は悲しそうな寂しそうなそんな顔をした自

分と同じぐらいの少女がいた。

健太郎は気にせず素振りをしようとする。

が出来なかった。何故かそれは今、砂場で遊んでいる少女の顔が昔の子供の頃の自分に似ていたからだ。転生前のあのぐらいの子供時代は自分は勇気がなかった。

まあ今もないが今よりなかった。

誰かが遊んでいる時に自分も遊びたいのに声をかける勇気がないからいつも一人で遊んでいて転生前の父は自分が生まれてくる前に亡くなっていたので母は仕事で忙しく親に迷惑をかける訳にもいかずゲームしたり外で一人で遊んでいた事を覚えている。その時の顔と今いる少女の顔が重なった。

「はあ…」

今からする事は偽善者だ同情だ。だけどそれをする自分に溜め息と自分に対する怒りが生まれた。

「はーっ」

一回深呼吸する。この歳になっても緊張するのだ。

「フー…よし！」

息を吐くと気合いを入れて少女に歩みよる。

「あのさ」

「へっ…？えっ…わ、私？」

声かけた少女は驚いた顔で振り向いた。そして二、三回公園をキョロキョロと見渡すと自分に声をかけていると気づき緊張したおももちで問い掛ける。

「うん、一緒に遊ぼうよ」

「えっ…でも私と遊んでもあんまり面白くないと思うよ」

「そんなの関係ないよ。それとも僕と遊ぶの嫌…かな？」

「ち、違うよ…その…じゃあ一瞬にあ、遊ば」

少し照れながら指と指を合わせながら、もしもじと聞く少女に深くながらキュンときめいた健太郎だが、すぐに少女に笑顔で「もちろん」と答えるのだった。

この時の少女と健太郎の笑顔は自然と笑ったとても良い笑顔だったと、たまたま通りかかった老人が言うのだが…それはまた別の話である。

## 1話（後書き）

健太郎「と、いうことで1話終了だ」

アイナ《今頃1話ですか作者のやる気のなさを感じます》

健太郎「…まあでも作者は一応努力はしてるみたいだし」

アイナ《努力だけでは駄目なのです！文章を書く妄想力！投稿スピードを早くさせる指使い！何より作品を完成させる心がなくては駄目なのです》

健太郎「妄想力って…文章力だろ」

アイナ《それよりマスター》

健太郎「なんだ？」

アイナ《出番をもっと下さい》

健太郎「ストレート！いきなりストレートど真ん中に来たなオイ！」

アイナ《ストレートに言った方が伝わると思いました》

健太郎「まあ確かに…おゝい作品」

ダダダダダ 遠くから走ってくる音

ガタツク「やあ皆のアイドル作者ガタツク略してサクガタだよ〜ん

！呼びやすいようにガタツクって覚えてね！」

健太郎「じゃあ略すな」

アイナ《消えればいいのに…》

ガタツク「ヒドッ！まあアイナちゃんよ」

アイナ《ああ…名前が腐れた…》

ガタツク「だから酷いよ！あと出番の事だけど…テヘ。まだまだ後だよ〜ん」

アイナ《…マスター》

健太郎「はいはい…バリアジャケットセットアップ！」

キフィン！

ガタツク「え？なにっ、剣なんか持つちゃって…どゆこと？」

健太郎「お前を」

アイナ《食い殺す！》

ガタツク「ギヤアアアアアアアアアアアアア！」

グシャ…



健太郎「今回は絶妙と絶対と絶滅が入っている話だ」

アイナ《もちろん嘘ですが》

健太郎＆アイナ「《それじゃあゝまったねー！》」

## 2話

ある程度の事は予想していたが、健太郎が予想している以上の予想外の事が起こり健太郎は焦りを覚えずにはいらなかった。

何故か？それはもちろん…

「97、98、99、100！ケン君ケン君！100回終わったよお疲れ様！」

「ああ…うん回数ありがとうねなのはちゃん」

竹刀を専用の袋に入れ前に公園で一緒に遊んだ少女、高町なのはからタオルを受け取り少しかいた汗を拭う。

あの公園の出来事から1週間が経ったその1週間の間一日も欠かさずに高町なのはは公園に遊びに来ていた。

公園の隅っこにあるベンチに座り、健太郎を見つけると笑顔で健太郎の元に寄ってきてヒマワリを連想させる暖かい笑顔を健太郎に振り撒くのだ。

そして一緒に遊んだり素振りを見学していると何日か経つといつの間にか、こういう状況になっていた。

自惚れかもしれないが、かなり自分に懐いていた。初めての友達だから嬉しかったのか遊んでくれるから嬉しいか分からないが、どちらにせよ懐いていた。今では「ケン君」と親しみをこめて呼んでくる。

正直言うと嬉しい。嬉しいがちょっと困った。

何故か？それは簡単だ健太郎はこういう異性に対して耐性がなかつ

たからだ。

転生前の世界では健太郎は異性の彼女一人も出来なかった。顔も体も普通。

頭は悪く家もあまり良くなかったからである。更に友人にイケメンが多かったともあるが、健太郎自体が恥ずかしがって避けて来たと言った方がいいだろう。

実際健太郎は気づいてはいなかったが転生前の世界で健太郎に好意を抱いていた異性は何人かいた。まあ、もう健太郎は死んでしまっているので関係ないのだが…

「それじゃあ今日は何しよつか？なのはちゃん」

「うーんつと…えつーと…何しよつか？」

テヘヘへっという笑顔を振り撒き言葉を返すのはを見ながら健太郎は思う「自分はロリコンかもしれないと」まあ今の姿の年齢は5歳だが中の人の年齢は16歳なのだ。「中の人などいないっ！」というツツコミが頭の中で響いた気がしたが無視する。

「ならウチにくる？ゲームなら何個かあるよポヨポヨとか」

「ケン君の家？うん行く！」

なのはの笑顔を見ると健太郎の頬は赤くなり照れるが「なら着いて来て案内する」といい顔を別の所に振り向く。照れた顔を見られないように家に歩きだした。

なのはも分かっているようで健太郎の隣に並び手を繋ぐという今の

健太郎には刺激が多い事を平気でやっているのはに健太郎は「将来、大者になるな」と心の中で思った。

余談だが健太郎の家になのはを連れて来た事により、なのはが帰らないといけない時間になりなのはを送って家に帰った時に両親からかわれたが、それはまた別の話し。

## 2 話（後書き）

後書き。

健太郎「ポヨポヨってぶよ よだよね」

アイナ《そうですね。ぶぶよだと思いますハードはPS2そっくりでしたね。名前はPA2ですよね。原形をとどめていそうで名前は酷い適当になってます。》

作者ガタツク「ちょwwやめてくんない？ が隠れきれてないし確かに名前は適当だけどさ…」

アイナ《マスター認めましたよこの屑野郎》

健太郎「お手柔らかに虐めてやんな。」

作者ガタツク「酷くねえ！？ 作者にもっと感謝を抱かないのキミ達は！」

アイナ《なら私にもっと喋る出番を下さいよ屑でアホでどうしようもない作者様。》

健太郎「結局は出番欲しいだけかよ」

アイナ《マスターは良いですよーなのはちゃんとベタベタラブライチャイチャしちゃって顔まで真っ赤にしてマスターはロリコンマスターです》

健太郎「ちが…そ、そんなんじゃない…それにアイナとは魔法の訓練とか日常でなのはより喋ってるだろ。今度作者に頼んでアイナの出番を増やして貰うから許してくれよ」

アイナ《確かに出番は欲しいですけど…》（マスターはなのはちゃんと話し過ぎです…）（ボソリ…）

健太郎「ん？何か言った？」

アイナ《いいえ、もっと魔法練習を頑張ろうと言ったのですよバカマスター》

健太郎「へいへい…分かったよアイナ」

作者ガタツク（あれ…俺かなり空気じゃあない…？）（

おわり。

### 3話

転生後の自分の家は少し裕福な普通家庭だった。普通のちよつと裕福な一般家庭だ。

だが健太郎は嬉しかった。それは自分専用の自分の部屋がある事だ。転生前は部屋はあったが兄と一緒にの部屋だったので自分なりに部屋を改造したり出来なかったからだ。だが、なんと、自分の部屋にテレビがあるのである自分専用のテレビがだ！

5歳の小学生の部屋に自分専用のテレビがあるなんて転生前の自分ではありえなかった事だ。この事で健太郎は、あまりの嬉しさに部屋のベットでゴロゴロ転げ回って頭を壁に強打して別の意味でベットでまたゴロゴロした事は良い思い出だ。

あと、一年すると自分は小学生になる。2度目の小学生で今度は勉強をちゃんと頑張ろうと健太郎は心に決めていた。

転生前は頭が悪かったので今度ぐらいは頑張ろうと決めていたからだ。

しかも転生したからか分からないが物覚えも良くなったような肉体的な能力も良くなったような、そんな感じがした。

実際スーパーキュートイプリティデバイス《アイナ》に聞いてみると転生者は別に神様に能力を与えられなくても転生後は肉体能力やら頭が少しばかり良くなるらしい。とスーパーキュートイプリティデバイス《アイナ》は言っていたな、と健太郎は思い出して自分の部屋のベッドに横になる。

ふと思いつくアイナが言っていた事を思いだす。思いだすのは自称神様から貰った力《誰にも屈しない圧倒的力》をだ。

実はこの力は、すぐに最強という訳ではない。《誰にも屈しない圧倒的力》には種類がある。例えば《誰にも屈しない圧倒的魔力》、《誰にも屈しない圧倒的攻撃力》などだ。

《圧倒的魔力》となると、その能力を使っている限りは無限に等しい魔力を保有する事ができ、《圧倒的攻撃力》となると、その能力を使っている限りは言葉通り攻撃力、つまり自身の攻撃が圧倒的な程にアップするなどだ。

一見凄い能力にも聞こえるが実際は、かなりめんどくさい能力だった。まず問題点1として能力1つ1つにリミッターがついている事だ。

そして問題点2は、そのリミッターというのは《心リミッター》という意味不明なリミッターがついている事が1つ。

そして問題点3は、心リミッターとは自分、つまり吉田・健太郎が心に強く思った事でリミッターが解除される。

それなら普通に強く思えばいいだけじゃあないか？と思うだろうが違う。つかというか実際やったが出来なかったと言えはいいだろうか？

アイナからの説明によると吉田・健太郎つまり自分が自然に強く思ったらリミッターが外れるらしい。

そして最後問題点4は、今持っている《誰にも屈しない圧倒的力》は、《誰にも屈しない圧倒的ストレッチ》に《誰にも屈しない圧倒



的睡眠速度』という事である。

正直にアホらしい能力だった。健太郎は自分の能力ながらそう思うのだからしょうがない。

普通に魔法を使うなら圧倒的魔力とか圧倒的防御力とか圧倒的攻撃力とか、そんな感じの力が欲しいのは当たり前だし睡眠速度ならまだしも…ストレッチってなんだよ…と健太郎は「ハア」と自身の部屋で溜め息を吐くのであった。

《マスター》

「ん、どうしたアイナ？」

《マスターの能力が一つ増えました。》

「なにっ！」

健太郎は、すぐにベッドから飛び起きる。腕につけているアイナに視線をすぐに移す。

実は能力が増えた事が分かるのは神が造りだした健太郎専用のデバイスしか分からないのだ。

「で、な、何だった!？」

焦ったように聞き返す。当たり前だった。もしかしたら自分の希望している能力かもしれないという希望があったからだ。

ゴクリ…

緊張して唾を飲む音が聞こえた。そしてアイナは健太郎に言い放つ。

《マスターが新しく保有した能力は《誰にも屈しない圧倒的アホらしく思う》事です。》

「い、い、いるかあああああああああああああ！」

健太郎の部屋から情けない叫びが部屋にこだましたのであった…

### 3話（後書き）

後書き。

健太郎「俺の能力使えないよなあ…」

アイナ《マスターが自分で頼んだですよね自業自得だと思います》

健太郎「いやお前…だって…なあー」

アイナ《そう言われてどうにもなりませんよ。プラス思考に考えればいいのです条件を満たせば最強みたいな》

健太郎「まあ確かに…」

アイナ《それに能力がなくても私がいるから大丈夫ですスーパーキユーティープリティデバイスアイナ様がいるかぎりマスターは守ってあげますよ》

健太郎「それは心強いなスーパーキユーティープリンティードバイスアイナは」

アイナ《プリティですバカマスター》

作者ガタツク（あるれえ？…後書きって作者が主役なんだよねえ？）

おわり。

## 4話

《マスターは小学生になりました。》

「まあ、2度目の小学生だな…」

そう吉田・健太郎はピカピカの小学生一年生になった。

学校指定の制服に鞆やらなんやらが机に置かれている。

正直、また小学生からやり直すのか…と思うと一言で言うところのダルイにつきる。だが、それだけの価値がある力に人生を手に入れたと思えば、気持ちが楽になった。

さて、そんな事よりも実は自分が魔法使い？超能力使い？か、どうかは分からないがバレた。うん、確実に圧倒的に。

何故バレたかという話は数ヶ月前に戻る事になる。

それはなのはちゃんから暗い顔で、なのはちゃんの父親、つまりお父さんが病院のベッドで、ずっと眠っている状態だから、どうしたらしいのかな？と聞かれた事から始まった。

この話を聞いた時に健太郎は思う、かなり重い病気やら怪我などだと、もちろんずっと眠っている状態ならば意識も回復もしていないはずである。

何より健太郎に医者の資格もないし経験もない健太郎には、なのはちゃんの父親を助ける事など不可能だった。

いや、健太郎が所有している特殊な《誰にも屈しない圧倒的な力》ならば、もしかしたら可能かもしれないが、健太郎が希望している能力が今まで1回も来た事がないから事実をいうなら不可能だった。

実際に健太郎が持っている《圧倒的な能力》は、

・《誰にも屈しない圧倒的なストレッチ》

・《誰にも屈しない圧倒的な睡眠速度》

・《誰にも屈しない圧倒的なアホくさいと思う事》

の3つである。

この能力で誰かを助けろと思う方が無理じゃあないかと思うぐらい不可能だった。

それで健太郎は、なのはにこう答える。

「そうなんだ、ならなのはちゃんお見舞いに行こう！それでなのはちゃんの顔を見れば、もしかしたらお父さん良くなるかも！」

と、偽善者である事は確実、何故ならそう現実には甘くないと知っているから、だけど健太郎はそれは言わない。偽善者なのか、それとも健太郎の瞳に写る「それならいいな〜！」と笑いかける少女の笑顔があつたからなのか、それは分からない。

そしてなのはの父親にお見舞いするために健太郎達は病院に向かった。

結果的には何も起きらなかった。

父親を見て悲しそうな顔で見るのはを見ながら健太郎は、この父親は何をしているんだと思った。

親が子を心配するのは当たり前だ。それならば子が親を心配するのも当たり前だろう。と心の中で叫んだ。

健太郎は悔しくて堪らなかった子供の笑顔を守れない自分に怒りを感じた。

なのはに心配をかける。この父親に怒りを感じた。

何よりどうにか出来るかもしれない力を持っていながらどうにでも出来ない自分自身に苛立ちと怒りを感じながら…

健太郎は思う自分は正義の味方じゃあないし、そこら辺にあるゲームやアニメの主人公みたいにならなくても良かった。

ただ…

ただ一人の友達の笑顔にさせるそれぐらいの力があってもいいだろう！と思ってしまうのも仕方ない。

人間は強欲なのだから…

《何より自分は強欲なのだから》

だから寄越せ…



傲慢？結構だ…

ガキの戯言？知らない今は自分は子供なのだから…

我が儘？人間が我が儘なのは当たり前だ…

奇跡は起きないから奇跡？望んでいるのは奇跡ではない望んでいるのは《力》だ。

だから…自分になのはの父親の体を良くする《力》を寄越せ！  
望むのは力…要求するのは《圧倒的な力》この時、吉田・健太郎という傲慢、強欲、祈り、願い、奇跡に祈る奇跡が…全ての思いが奇跡を起こす。

《マ、マスター能力の追加を力、確認しました。》

アイナが能力追加の知らせを念話で知らせてくる。

いつもは、すぐに知る為にすぐに、がつつくように聞き返すのだが健太郎は冷静にアイナの話に耳を傾ける。

《マ、マスターが新しく保有した能力は《誰にも屈しない圧倒的な高町なのはの父親に奇跡を起こす力》です》

グツと健太郎は拳を力いっぱい握り締めた。今度は悔しさではない…希望を掴んだ歓喜の表現だった。

さて、それからの事だが、あの後なのはと一旦家に帰り自分の家に帰って夜中になのはの父親がいる病気に訪れる。

もちろん使つのは今日新たに入手した力。

なのはの父親の病室に着き入る。健太郎は扉を音をあまりたてずバリアジャケットをセットアップする。

「親が子を心配すると同じように子が親を心配するのも当然なんですよ……」

そう健太郎は小声で呟きアイナの補助のもと能力を制御する。健太郎の手の平にサッカーボールぐらいの薄緑の光が集まる。しばらくすると薄緑の光は小さなボールぐらいの光のボールに落ち着いた。

「それになのはちゃんは友達だから自分出来る事ぐらいやっておきます。」

そしてなのはの父親に光のボールを胸の中心に押し付けると光のボールはスーッと体に吸い込まれていき見えなくなった。

「後は自分でどうにかお願いします。自分に出来るのは奇跡を起こす力だけだからです……後……起きないとなのはちゃんは貰っちゃいますよ。なんちゃって……」

健太郎は、そう言うとなのはの両親から背を向け帰る。

やる事はやったし言いたい事は言ったし健太郎は帰る事にした。もちろんなのはを貰うというのは冗談だし健太郎にはそんな勇氣もなかった。

何より健太郎は16年間彼女いないのはダテじゃあないのだから、まあ……総合すれば20年間だが。

「残念だがウチ娘はあげられないなあ」

健太郎はビックリして後ろを振り向く振り向いた先にあったのは笑顔で上半身だけ体を起こした高町なのはの父親だった。

明らか早い。健太郎はそう思った。奇跡を起こす力と言ってもまだ1分も経っていないのだ。

「君は確かになのはの友達だったかな？私の名前は高町士郎なのはの父親だよ君は？」

健太郎の考えをもっともせず高町なのはの父親、高町士郎は健太郎に笑顔で問い掛ける。

「自分の名前は吉田・健太郎、なのはちゃんと友達です。後、貰うと言うのは冗談なので本気にしないでもらえると嬉しいです。」

心の中では健太郎はテンパっているが士郎の問い掛けに表情だけは冷静に答える。

「ふむ、そうか健太郎君だね。なのはは遊んでくれて有難う後、冗談だったのかい？それと……君が僕を治してくれたんだろ？有難う」

「確かに何かしたのは自分ですが結果を出したのは士郎さんです。それとこの事は……」

「でも有難う。それと分かっているよ秘密……だろ？」

話分かる人で助かったと健太郎は思う。

このあと少し話をしたあと健太郎は家に帰った。

帰る時に士郎が礼は必ず後でするという言葉を「ジュース1本ぐらいでいいですよ」と恥ずかしいがりながら病室を後にした健太郎は急いで家に帰った。

もともと人に感謝されるというのに健太郎は慣れていないのだ。

後日、高町なのはが健太郎に父親が目を覚ましたと報告があり笑顔いっぱい顔があつたそうだ。

#### 4話（後書き）

後書き

アイナ《私、全然空気状態何ですが…》

健太郎「いや確かに話には出てないけど影ではめちゃくちや喋るだろ」

アイナ《それでは意味がありませんよ！》

ガタツク「やあ！」

健太郎「あ、やけに久しぶりなよな気がする」

アイナ「あ、存在自体が屑みたいなものですからね…喰われる」

ガタツク「ヒドッ！ってか喰われろって何に！！！？？」

健太郎「で、何しに来たんだ」

ガタツク「え、遊び来ただけだけど？」

健太郎「いや続き書けよ」

アイナ《使えない野郎ですね》

ガタツク「いやだから作者の扱いが異常なほど冷たいんだけど…」

アイナ《まあ、ドンマイです》

健太郎「まあ、頑張れ」

ガタツク「チクショーツ！」

アイナ《そんな事より次回はなんと最終回！》

健太郎「もちろん嘘だけだな」

ガタツク「まったねー」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4927/>

---

リリカル転生人生

2011年10月7日05時16分発行